社団法人名北労働基準協会

六十年のロマン

6

石田幹夫

―旧師団司令部跡へ移転―

昭和28年8月、名古屋北労働基準監督署（以下「名北労基署」という）は、当時愛知労働基準局と同居していた中区南外堀町から名古屋城南の旧師団司令部跡に独立庁舎として移転することになった。

同居していた協会事務局も必然的に名北労基署に蹤いて移転し、労基署の一隅を借りて執務に就いた。

―昭和28年当時の名古屋城周辺―

今日金色に輝く鯱をいただき、偉容を誇る名古屋城も昭和20年5月の名古屋大空襲による戦火を浴びて炎上、むなしく落城した。昭和28年当時の名古屋城周辺の四季を振り返る。

―冬は城のない城門を轟々と松風が吹き荒び、春は穴を出た虫が地を歩き、空は鳥が囀り、夏は雲の峯を遠くにおき、空濠を草が茫々と覆い、秋は夕光に映えた芒が音もなく揺れていた―

当時はまさに―落城―の名の通り荒涼たるものであった。

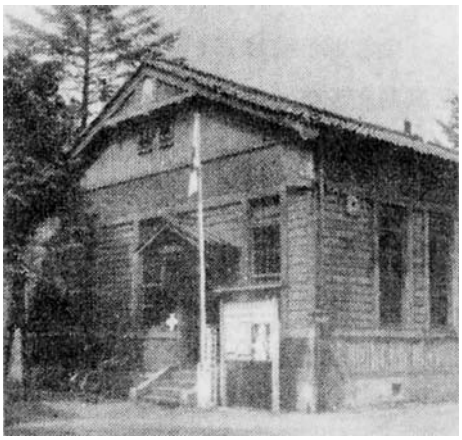
この昭和28年は、3月に吉田首相の「バカヤロー」の一言に端を発し、衆議院解散が行われた。

当時、ラジオの人気番組「君の名は」が映画化され、数寄屋橋ならぬ納屋橋付近を眞知子スタイルの女性の闊歩する姿も見られた。

―独立した協会事務局設置の念願―

かねてから協会事務局には―独立した協会スペースが欲しい―という強い念願があった。

当時、名北労基署に隣接して元復員局の建物が残っており、この建物の一部を借りることに成功し、昭和33年7月1日に元復員局跡に引っ越した。



昭和28年8月名北労基署・名北協会が入居した旧師団司令部跡の庁舎

協会設立は昭和26年10月、事務局設置が昭和27年4月、事務局設置から6年3カ月の年月を経て念願の―独立した事務室―を得ることができた。

新しい協会事務局は約30坪（99平方メートル）で、男性2名女性2名が執務し、事務室のほかに会議室も設けることができた。

―名北労基署・名北協会の青春―

名北労基署が入っていた旧師団司令部、名北協会が入っていた旧復員局の建物はともに古びた木造建物で、歩くたびにぎしぎしと音を立て、戦後はまだ終わっていなかった。

当時、名北労基署は、―労基法・労災法等の普及、安全衛生活動の推進、賃金不払事案の解決、解雇予告手当の支払、長時間違法残業の排除―などに、ある日は自転車で、ある日は徒歩で靴底を減らして広い管内を廻った。

また、名北協会は、―新規会員の加入促進活動、未納会費の徴収、会報の発行、結核予防対策の推進、当時異常発生した集団赤痢への対応―などにある日は東へ、ある日は西へと足を延ばした。

労基署と協会の建物の中間に少しばかりの空地があり、そこにネットを張って昼の休憩時間に双方の職員がバレーボールを楽しみ喚声をあげた。

今日では想像することのできない貧しい環境の中で、労基署・協会の素朴な一体感、労働基準行政の草創期のきらめき、人生に例えればそれはまさに名北労基署・名北協会の青春そのものであった。

（名北労働基準協会副会長）